基地のある街、コザの歴史と発展

田辺　亜矢子

Ⅰ はじめに
Ⅱ 沖縄市について
　1)戦闘経過と戦没者数
　2)一般住民の被害
　3)嘉手納基地の概要
Ⅲ コザの現状
Ⅳ コザのこれから
Ⅴ おわりに

Ⅰ　はじめに

2004年12月に地理学総合実験学習の一環として沖縄に行くことになった。著者はその実習のテーマとして「基地」を取り上げることにした。沖縄の特殊なところと言えばかつては米軍統治下にあり、日本からは切り離されていたこと、そして今も米軍基地が沖縄全土で広大な土地を利用していることがあげられる。そのことが住民に与えている影響はかなりあるであろうと考える。そして最も米軍関係者との関係が深い街であるコザにテーマをしぼった。ここは戦後米軍基地と共に姿を変え、朝鮮戦争やベトナム戦争の時に米軍が落としていったお金で栄えた町であるが、今は景気に陰りが見えている。米軍相手だけではやっていけなくなった街は、基地と共に発展してきた街として、これからどのように発展していくのだろうか。

Ⅱ　沖縄市について

1）沖縄市、コザの歴史

沖縄市は古くは越来（ごえく）村と称していたが、第二次世界大戦後、1945年の9月15日に、米軍の指令によって「コザ市」となった。もともとは農業などを営んでいたごく一般的な沖縄の村だったが、極東最大の米軍基地である嘉手納基地を背景に沖縄本島はもとより周辺の島々、日本本島からも多くの人々が職をもとめて集まり、飛躍的に発展した。1950年代のコザ人口の６割までもが流入人口で、商業・娯楽サービスに従事する8割は他地方から流れ込んできた人々で占められ、その多くは基地関係業に従事した。

「コザ」の名称については、軍が胡屋（GOYA）をKOZAと誤認したものというのが最も有力な説であるとされる。コザは沖縄の中でも特に米軍人相手の商売が発達し、米兵は多くのB円やドルをコザにもたらし、そのおかげでコザの経済は発達した。しかし同時に沖縄県民は、常に軍事演習や騒音による危害、婦女暴行などの生命にまで関わる危険にさらされると共に、米軍人からはかなり差別的な扱いを受けていた。コザでの商売には、飲

食店や土産屋のほかに女性が働く風俗店があり、大勢の女性達が米軍人相手に働いた。その女性達はもともとそういう商売をしていた者ばかりではなく、戦後初めて従事した者も多かった。沖縄戦により働き手である男性を失い、貧困に苦しむ家族を養うための仕方なし手段であった。朝鮮戦争やベトナム戦争の際には、前線に送られる兵士達が普通ではない精神状態をなだめるように毎晩遊び歩き、大量のドルを使用し、コザの経済は多いに潤った。

このように米軍人を相手に働いていた女性達は確実にコザの経済の担い手の一部であった。しかし、このような女性をコザの住人達の多くは差別的な目で見ていた。このことはコザの住民は米軍人相手に商売をしながらも、彼らに対して反発していたことを象徴している。

当時沖縄には「Aサイン」という制度があり、それは衛生面などで合格とされた店に提示され、その提示がない店には米軍人の立ち入りが禁止された。コザで商売をしていく上で「Aサイン」がもらえないということは死活問題である。また、立ち入り禁止令である「オフリミッツ」が発令された地域は、たちまち経済活動が滞る。米軍側にとっては効果的な圧力である。米軍はコザの経済を支えると共に、簡単に操作もできる絶対的な存在であった。経済的な依存と基地問題という相反する性質をもったコザと基地の関係はかなり複雑であった。

そして、全国にコザの名を広める事件が起こった。1970年12月20日の未明、米軍人の起こした人身交通事故がきっかけとなって起こった「コザ騒動」である。この騒動は沖縄の住民が米軍に挑んだ実力行使として戦後史に刻まれている。コザ騒動は米軍統治下で日本の法律が及ばないところで起きた。しかし、一件の人身交通事故だけで騒動が起きたわけでないのは言うまでもない。沖縄戦に続く、25年間の米軍支配によって、沖縄の住民の人権は、軍事政策優先でほとんど無視されてきた。 そのつもり積もった怒りがその事故をきっかけに爆発したのだ。

同じ年の5月には米兵による前原高校の女子生徒刺傷事件、6月にはタクシー強盗の米兵を基地内に逃がす事件が発生していた。 そして9月に糸満町（当時）で酒酔い運転の米兵が主婦をれき殺したが、裁判で無罪放免となった。これらの事件事故に対する住民感情の高まりがついにコザ騒動にまで発展したのだ。普段は米軍人を相手に商売をしていた者まで騒動に加わった。しかしもちろん止めようとした住人もおり、住民すべての行動であったわけではない。

騒動では米人車両82台が焼かれ、米軍関係者61人が負傷した。そしてこの事件で攻撃されたのは主に白人の関係者であった。沖縄住民が黒人の兵士には事前に騒動が起こることを伝え、避難させたためである。当時同じように差別される立場として多少なりとも黒人兵士の方に親近感を持っていたということだ。当時の軍人社会には人種差別が明確に存在しており、街は白人街と黒人街が存在し、飲食店や風俗店もはっきりと分けられていた。沖縄住民も白人と黒人を区別していて、白人街働く女達は黒人街で働く女達を差別した。だ沖縄住民側では27人が負傷し、21人が逮捕された。しかし両方に死者はなかった。

コザ騒動から2年後の1972年、沖縄は27年間の米軍統治を経て日本に復帰し、1974年、コザ市は隣の美里村と合併して「沖縄市」となった。「コザ」の名前は地図上には存在しない名前になってしまったが、この界隈は今もコザと呼ばれている。

2）沖縄市の概要

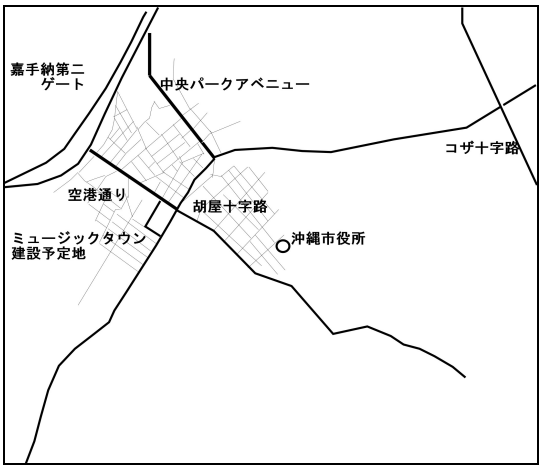
沖縄市は沖縄本島の中部東海岸側にあり、沖縄中部の中心都市である。アメリカ軍の極東最大の基地である嘉手納基地が沖縄市の面積の約36％を占めている。

沖縄市の人口は2000年現在で約12万人であり、増加を続けているがその増加率は鈍化しつつある。世帯数は約4万世帯となっており、増加率は人口よりも顕著である。世帯の構成員の人数は平均して約3人と、核家族化が進んでいる。

沖縄市は卸小売業、サービス業を中心とする消費傾向の強い都市であり、産業の割合は第3次産業が77.1％と最も多い。次いで第2次産業は20％、第1次産業1.8％という割合になっている。工業は小規模の企業が多く、業種としては食品製造業がもっとも多く、ついで金属製品製造業、家具・装飾品製造業の順になっている。農業は、都市化による耕地面積の減少で基幹作物のサトウキビや野菜の生産量が低下している。かわって、花木園芸（菊、蘭、バラ、観葉植物など）の生産業が伸び、これからはマンゴーやびわなどの果樹栽培も期待されている。畜産業では、牛、豚、採卵鶏などの飼育のほか、養蜂業も営まれている。漁業は中城湾を中心とした湾内漁業から湾外漁業への移行が進められている。魚種はマグロ類、カツオ、シイラなど。

完全失業率（平成12年）は11.7％を越え、県平均の7.8％という数字をも上回っている。

沖縄市中心部の地図



＊goo地図より作成

3）嘉手納基地の概要

約19.95平方キロメートルの広大な面積を占有する嘉手納基地は、嘉手納町、沖縄市、北谷町の一市二町にまたがっている。同基地は、昭和19年9月に旧日本陸軍航空隊の中飛行場として開設されたが、戦後まもなく米軍に接収され、以来、数次にわたる整備･拡張を繰り返しながら50年余りにわたる今日まで米軍基地として使用されてきた。現在、同基地には太平洋空軍第5空軍（横田基地）隷下の第18航空団を主力部隊に同航空団所属の第909空中給油飛行中隊、第961航空管制飛行中隊や第33空中救難飛行中隊等が常駐している。このほか嘉手納弾薬庫地区、陸軍貯油施設が連動して所在する。このように嘉手納基地は、米空軍を中心に海軍及び海兵隊が共同使用する米国によるアジア戦略の一大総合拠点基地といわれている。

Ⅲ　旧コザの現状

コザの中心部といえるゴヤ十字路から嘉手納基地第二ゲートまでの道である空港通り、今は中央パークアベニューと呼ばれる元ビジネスセンター通りを主に見学してきた。（地図参照）沖縄市にはアメリカだけでなく、インド、タイ、メキシコなど様々な国籍の人たちが住んでおり、その中でも最も国際的な土地がこのあたりである。今ではもちろん白人街や黒人街といった区別はなく、歩いている人の人種は様々であった。

ここには外国人サイズの洋服屋も多いが、時計屋、電気屋、質屋なども多い。朝鮮戦争やベトナム戦争の時には嘉手納基地には今よりも数倍多い人数の米軍兵士が勤務していた。その米軍人達に、セイコーの時計や日本メーカーの電気製品は日本土産として飛ぶように売れたのだ。そして彼等は帰国の際には不要な物を質屋に売って整理した。そして同時に、当時は特飲街と呼ばれた風俗街もおおいに賑わった。そういう店で働く女性が着るのであろう露出の多いドレスなどを売る店もあった。英語でも張り紙が書かれており、客には外国人のホステスもいるようだった。そして少し離れたところにではあるが、古い翻訳業の看板を出した店もあった。米軍人と関わりはあったが英語のわからない沖縄住民はここで様々な文書を翻訳していたのだろう。沖山（2000）によると女達が米軍人の客からもらったラブレターを翻訳してもらうのにも利用されていた。いわゆるクラブやショーパブなど夜の店も多かった。どの店も看板が英語で書かれており、ドルで清算できる店も多くある。そのほとんどが外国人向けであるのが見て取れる。ここは昔米軍人たちと、彼らを客とした女達の街だったようだ。そしてここには米軍兵士むけにロックやジャズを演奏したライブハウスもある。沖縄市役所の富永さんによるとその演奏者はアメリカ人ではなく、沖縄住民であった。また彼は、ここは沖縄市の特徴を最も反映しており、多国籍で、様々な文化が入り混じった土地である。今では空き店舗がやや目立ち、昔ほどの賑わいはないが、沖縄市の活性化における基盤となるには充分な要素を持っている。とも話した。

写真　空港通りショーパブ

写真　空港通り空き店舗

Ⅳ　旧コザのこれから

沖縄市は、基地に勤務する米軍兵士の減少に加えて、彼らは昔戦争で好景気だった頃よりも、基地外での外食や消費行動を控え、倹約する傾向にある。そして沖縄県への観光客は平成12年に約452万人となっているのに対して、沖縄市への観光客は約120万人である。この数字だけみれば多くの観光客が訪れているようだが、沖縄市総合計画によると市内の

ホテルにおける宿泊客数は約16万人（延数）となっており、この数字から立ち寄るだけの日帰り観光客がかなり多いということがわかる。卸小売業やサービス業の割合が高く、消費傾向にある沖縄市の経済において、この傾向は大きな問題である。そこで沖縄市にはいくつかの活性化の為の計画が進められている。ここではコザに焦点を絞り、その国際性や文化を基盤とした街づくりを考える。

沖縄市にある活性化の要素のひとつは豊かな人材と文化である。戦後米軍基地とともに発展してきたコザでは多国籍な文化と沖縄独自の文化が混ざり合った独特の文化、「チャンプルー文化」が発達した。沖縄住民は生きるために、様々な商売をした。そのひとつに米軍相手にロックやジャズを演奏するライブハウス経営があった。その演奏者はアメリカ人ではなく、日本人である。新しい音楽を身につけたことは本人の興味からではなく、生きるための手段だった。そして彼等はこうして異文化を取り入れる一方で、沖縄独自の文化も大切に保ってきた。その結果として沖縄の文化と異文化の混ざり合った、沖縄の誇る「チャンプルー文化」が育ったのだ。そしてその豊かな文化を持つ地域で大勢の優れた文化の担い手が大勢育った。今大活躍しているオレンジレンジも沖縄市の出身であるし、ネーネ―ズなど、有名な民謡歌手も沖縄市出身の人が大勢いる。

このような事実から、沖縄市ではコザを中心に音楽の街づくりを進めている。沖縄市では、ライブハウスや民謡酒場などの音楽産業が発達しているとともに、「沖縄全島エイサー祭り」「ピ―スフルラブ・ロックフェスティバル」「沖縄国際カーニバル」などのイベントを開催し、独特の文化が高い評価を受けるようになった。そこでこの文化を産業資源として確立させるためにミュージックタウンの形成という計画がうまれた。

計画予定地は胡屋十字路と空港通りの交わるところ、まさに市の中心部に位置している。ここは公共で整備して民間に委ねる公設民営の体制をとる予定であり、賑わい創出事業、コンテンツプロデュース事業、ソフト事業を展開していく。この施設にはステージやスタジオ、店舗の他にギャラリーが設けられ、セミナールームなども設置され様々な音楽活動が行われるようになる。観光施設であるとともに、次の世代を担う人材を育成することも目的としている。

地域全体の活性化につなげる為にはイベントの開催、支援を行うことによって音楽の街沖縄市における観光の中心とするとともに、ライブハウスや民謡酒場など各種店舗のネットワーク化、各ミュージシャンの音楽活動の促進も課題となる。

写真　ミュージックタウン建設予定地

このように沖縄市では米軍基地が出来たからこそ生まれた豊かな文化を街づくりの基盤のひとつとなっているが、その街づくりを支える経済的な基盤もまた米軍基地によるものである。沖縄市には基地関係収入は基地交付金、防衛施設周辺整備事業の助成金、軍用地の賃貸料などが国から交付されているのだ。その額は年々増加しており、平成１３年には約44億円にのぼる。

沖縄の文化は今日本中から注目されており、沖縄出身のアーティストが多くのひとに受け入れられ全国で活躍している。この沖縄市のミュージックタウン構想が成功する可能性は充分存在している。

Ⅴ　おわりに

今回沖縄市に訪れて、コザと米軍基地の様々な関係を学んだ。ニュースでは米軍の関係者の起こす事件や環境問題などの悪い面ばかりが取り沙汰され、沖縄にとって基地は面倒なだけの存在なのだと思っていた。しかし実際は米軍基地の兵士の消費行動により町が発展し、人が集まり、コザは現在の姿になったのだ。そして今街づくりを進める上でも、基地との関わりが生んだ文化や国際性を基盤にすると共に、その予算も基地があってのものである。騒音や環境問題、米軍兵士の起こす事件など、深刻な問題がある反面、経済面などの依存も存在し、コザと基地は良くも悪くも切り離しては考えられない。コザの持つ独特の雰囲気を損なわず、最大限に生かしたこの街づくりが成功すれば、コザと基地の関係はまた違ったものになるのだろうか。

今回の調査において、コザを実際に訪れてその雰囲気を実際に味わった。そして沖縄市役所企画課を訪れ、コザの歴史や発展、そして街づくりについてお話していただいた。そのことによって、文献で読むよりも現実的にコザを感じることができ、コザ騒動や市の政策などについての貴重な資料も閲覧できた。しかし残念なところは、実際の文化の担い手である住民側からの意見を調査に取り入れなかったことだ。もし住民の方からも話しが聞けていればもっと違った見解が生まれていたかもしれない。今後またこのような調査をする機会があれば、様々な立場の方から意見を伺い、より深く理解していきたい。

文献・資料

大山朝常（1997）:『沖縄独立宣言―ヤマトは帰るべき祖国ではなかった』現代書林.
沖縄市役所HP　http://www.city.okinawa.okinawa.jp/site/view/index.jsp（2005年2月28日閲覧）
沖縄市企画部企画課（2001）:『沖縄市総合計画』沖縄市役所.
沖縄市企画部平和文化振興課（1999）:『米国が見たコザ騒動』沖縄市役所.
沖縄市サミット推進本部（2000）:『明日に向かって 沖縄市・アメリカ合衆国 交流の歴史』沖縄市役所.
沖縄情報IMA　http://www.okinawainfo.net/　（2005年2月28日閲覧）
沖縄市職員厚生会文芸クラブ（2003）:『中頭文化　第27号』沖縄市職員厚生会.
沖縄タイムス社（1998）:『庶民がつづる沖縄戦後生活史』沖縄タイムス社.
沖山真知子（2000）:『底辺の女たち』ひろ編集工房.
高村真（2000）:『コザに抱かれて眠りたい』ボーダーインク.